

ただ一つの映画が、これほどまでに熱狂的な賞賛を浴びたことは、かつてなかった。

1979年度最優秀作品

●ゴールデングローブ賞 ●ロサンゼルス映画批評家協会賞 ●ニューヨーク映画批評家協会賞

「クレイマー、クレイマー」は人生においても、映画においても、描ききれないよ
うなすばらしい光景を見せてくれる。 *タイム誌*

完璧な作品…ホフマンとストリープの演技は、感情の繊細な表現を見事に示し、い
かなる点から見ても最高の出来である。 *ニュースウィーク誌*

ダスティン・ホフマン

最優秀主演男優賞

- ゴールデングローブ賞
- ロサンゼルス映画批評家協会賞
- ニューヨーク映画批評家協会賞
- 全米映画批評家協会賞

「クレイマー、クレイマー」の演技によ
って、アカデミー賞は、ダスティン・
ホフマンに与えられるべきである。
-ジム・ブラウン, NBCテレビ

この映画が、彼の代表作になるほどの
すばらしい演技だ。アカデミー賞は、
彼に与えられるに違いない。
-ロナ・バルット, ABCテレビ

ホフマンは、偉大な演技を生み出した。
アカデミー賞の最有力候補になるだろ
う。

-チャールズ・チャップリン, L. A. タイムズ

メリル・ストリープ

最優秀助演女優賞

- ゴールデングローブ賞
- ロサンゼルス映画批評家協会賞
- ニューヨーク映画批評家協会賞
- 全米映画批評家協会賞

メリル・ストリープの演技は、最高に
感動的だ。

-ニュースウィーク誌

ストリープのひかえ目な力強い演技が
すばらしい。

-ジョージ・アンソニー, トロント・サン紙

彼女の演技は、この映画全体に響き渡
っている。

-ジーン・シャーリット, NBCテレビ

ジャスティン・ヘンリー

ジャスティン・ヘンリーのリアルな演
技は、真に感動的だ。

-タイム誌

こんなにも小さな子供の演技に、ただ
ただ驚くばかりだ。

-レジス・フィルピン, ABCテレビ

ロバート・ベントン

最優秀監督賞

- ロサンゼルス映画批評家協会賞
- 全米映画批評家協会賞
- 最優秀脚本賞
- ゴールデングローブ賞
- ロサンゼルス映画批評家協会賞

ロバート・ベントンは、すべての観客
に映画のすばらしさと奥深さを体験さ
せる。

-フランク・リッチ, タイム誌

ロバート・ベントンの人間像をとらえ
た演出は、簡潔で胸をうつ。

-ボブ・トーマス, AP

この映画は、驚くほどすばらしい感動
のドラマだ。

-ティビッド・テンビー, N. Y誌

クレイマー、クレイマー

Kramer vs. Kramer

コロムビア映画提供 スタンリー・ジャッフェ製作

ダスティン・ホフマン

“KRAMER VS. KRAMER”

メリル・ストリープ ジェーン・アレグザンダー

ジャスティン・ヘンリー

撮影/ネスター・アルメンドロス 原作/エイブリー・コマンのベストセラー小説 原作邦訳サンリオ刊

製作/スタンリーR. ジャッフェ 監督/ロバート・ベントン



●「なぜ、こんなにも涙が流れるのだろうか」
全米で各賞独占！80年代を投影する話題作

記録破りの大ヒット、感動の話題作「クレイマー、クレイマー」
アメリカでは、当なりに当たって数週間連続トップを記録し
続け、前評判通り、広く人々の心を感動してゆさぶった。

各映画賞も独占受賞し、アカデミー賞も
大量の数部門にノミネートされた。
アメリカの世界的に有名な雑

誌、タイム誌やニューズ
ウィーク誌でも大々的

に取りあげられ、「男も
女も、この映画を見

る人すべての人々に、
なぜこれほどの涙を

しぼり取るのだろうか」
とこの映画をほめちぎって

いる。夫婦のそして親子の
愛情を心にしみわたるように

描いた作品、それが、「クレイマ
ー、クレイマー」だ。

クレイマー、クレイマー Kramer vs. Kramer

© 1979 Columbia Pictures Industries, Inc.



●愛とは、結婚とは、親子
とは何かを描く感動作品。

ジョアンナはマンハッタンの夜明けを見つめなが
ら、夫のテッド・クレイマーと別れる決意をし
ていた。結婚して8年、7歳のかわいい息子
(ビリー)を持ち、何の経済的な不自由も
ない恵まれた家庭——だが、妻であり、
母であり続けることに疲れたジョアン
ナは、仕事で朝帰りをしたテッドに
別れの言葉を言うと彼の手を振り
払うように家を出た。

突然の別れに、とまどうテッド。
そして「ママはどこへ」と、ベ
そをかくビリー。その日から
テッドの生活は一変した。

これまではまったくノー
タッチだった家事と育児
が彼を襲い、エリート
ビジネスマンたらん
とする彼の足を
すくった。つい
には家の中にもた
仕事を持ち込むよ
うになったテッドの
イライラはつるばかり、

父と子でありながら、潤滑油で
ある母がいなくなつて、かみ合わせぬ歯車
のような毎日を送るテッドとビリー。が、それ

でも、いつしかこのぎこちない親父の子育てが、やが
て父と子の愛情をしっかりと育て、家を出た妻への理解も、ま

た芽生えるのだった。そして、ジョアンナの突然の出現。一年以上も
音沙汰のなかった彼女が裁判をしてでも子供を引き取りたいと言つて来たの
だ。怒り狂うテッド。しかし、裁判は一貫してテッドに不利に運び、結局、ビリーは
ジョアンナにわたることになった。そして、その日は来た……。

●4月5日(土)より、
感涙のロードショー

渋谷東急名画座

☎407-7229

●特別鑑賞券1,000円(一般1,300円・大学1,200円・高中1,100円の処)劇場窓口にて発売中!